

ミステリ読書案内

2023. 11. 24 発行元

第531号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

今村昌弘「でいすぺる」

9月に文藝春秋から今村昌弘の『でいすぺる』が出た。一作一作をじっくり仕上げるタイプの作家なので、やっと出た本書にも期待が膨らむというものだ。「謎解き本格ミステリ」+の部分は今回はどうだろう？

小学六年生が主人公

第一章だけが『オール讀物』に掲載され、残りは全部書下ろしの形で単行本になったもの。「でいすぺる=Dispell」とは「追い散らす、(心配などを)払い去る、(闇などを)晴らす、一掃する」と内表紙の裏で説明している。

小学六年生が主人公である。木島悠介が語り手を努める。そして同級生の波多野沙月と畑美奈が相棒の役目になる。と言いながら三人の会話を読んでみると、とても六年生とは思えないレベルの会話が続く。特に推理を検討する場面のやりとりは大人顔負けの内容。

地元で伝わる七つの怪談話

ユースケは怪談、オカルト話に興味がある少年。クラスの掲示係に立候補して、壁新聞に記事を書こうと考えた。そこへサツキも立候補して、当日欠席だったミナを加えて三人で担当することに。

ところがサツキが提案したのは、

地元奥郷町の「七不思議」の話。ということで最初に調査に出掛けたのは「僧門トンネル」。かつてトンネル事故があって、亡くなった赤ん坊の声が聞こえるとかの噂が広まった場所。調べてみると…。

この後、サツキが抱えている問題が明かされ、「七不思議」には過去の殺人事件が絡んでいることが明らかになってくる。話はどんどん深まっていき、「壁新聞」というレベルでは済まない話になっていく…。奥郷町の歴史に関わる部分が見え隠れしてくるようになる。

「怪談推理」としての展開

単純に「謎解き」でないところが今村昌弘の特徴なのである。最終場面近くになって、「ノックスの十戒」まで登場する凝りようである。細かな伏線を拾い集め、「本格もの」としての論理を積み上げているようで、その「粋」には納まらない。「怪奇なもの」の存在をどう理解していくかの問題に広がっていく。

「小説」なので、読者が納得し、

今村昌弘の作品

1. 屍人荘の殺人
2. 魔眼の匣の殺人
3. 兇人邸の殺人
4. ネメシス
5. でいすぺる

1～3は東京創元社から。4は講談社タイガに納められているテレビドラマ原作。5だけが文藝春秋。

楽しんで読めれば良いわけで、その意味ではまずまずの成功を納めているのではないだろうか。単行本にしては薄い紙を使用しているせいか430ページもあるとは思えない本なのだが、ボリュームはそれなりに大きい。

「七不思議」の「七」はちょっと多かったかな？ 中盤で少し中垂るみを感じる。『屍人荘』のシリーズに比べると盛り上がりはわずかに少なめか。帯には「雪室の謎」とも書いてあるが、アリバイトリックのようなもの…。

今後の作品に期待を…

今村昌弘は寡作な作家の部類。次の作品がいつどんな形で出版されるかわからないが、期待は膨らむ。「本格ミステリ」の型をどのように拓けていってくれるかがポイント。「ありきたり」の作品では読者は満足してくれないだろう。

はやみねかおる「NYでお仕事を」「摩天楼は燃えているか」

『バトルロイヤル』と副題が付いており、前編に当たる『NYでお仕事を』が出たのは5月。後編に当たる『摩天楼は燃えているか』が出たのが8月。講談社青い鳥文庫。『怪盗クイーンシリーズ』の最新刊になる。今回は「世界征服券」というカードを巡って世界中の悪党がニューヨークに集まってくる話。そもそもの仕掛け人は国際刑事警察機構のアメリカ人探偵卿ナバリア・フリスクなのだが…。

今までこのシリーズに登場してきた世界中の悪党、クイーンとその仲間たち、皇帝とヤウズ組という物語の中心となる人物だけでなく、ホテルベルリン・グループ、初楼グループ、それにグーコ王国のイルマ王女、日本代表の端神斗真少年、地元のギャングと入り乱れ、国際刑事警察機構の探偵卿も十人以上出てくるので、これだけでもう混乱状態。誰が誰だかわからなくなってくる場面も…。「世界征服券」もどんな働きをするのかがよくわからず、ストーリー展開の中で効果的な役割りを果たせていない印象も。各人を動かさなければならぬ関係で、クイーンの活躍場面もそれだけ削られてしまった感がある。クイーンのパートナーであるジョーカーが主役級に取り上げられているのが読みどころか。エンパイヤステートビルを舞台にした攻防…。